チロンヌップ Vol.4

目次 第Ⅳ号

リーマのセーター　ばちるず　(2)
★リーマの作ったセーターってどんなの？

あるはずのないお話　絵 魔　(4)
★ここはあるはずのないところです。だからあるはずのないものしかいないのです。

ふり返った昨日　梁沢たかし　(8)
★ひろしが校庭でみたのは昨日の幻なのか

北風のバラード　高見 俊　ゆらべあきひと　(11)
★北風が冬に　変をしたんだってさ？

天国と極楽のレクイエム　仙下けい　(13)
★キリスト様とおシャカ様がけんかしたら…

風っ子　いど ゆりあ　(23)
★秋に風の子が花言をたずねてきて…

夢追い　ゆらべ あきひと　(28)
★兄嫁ねこが、求めた夢は何だったか

山じいフルーツ　千原 俊　(35)
★山じいの村でくさんは不思議な体験をした

ピンクボンフ　かとう くん　(39)
★ふりむくとまんまる目のキリンがいました

連載(2) 猫踏んずけられちゃった。
みんみん太鼓　三鬼亮輔　(43)

ひらけごま？

新鮮な作品をかきたいというのは、ぼくの願いです。俗っぽい物語をかくのは、どうも抵抗を感じてしまう。しかし、現実にかくのは、毎号願いと反対なものばかり＊＊＊＊＊

特に季節をテーマとした作品は、俗に陥りやすいのです。とりわけ秋は＊＊＊＊＊

秋になれば、不思議と人恋しくなるし、わけもなく悲しくなったりします。紅葉したモミジをみて〝きれい〟だと思うのは極自然なことですが、それでは、おもしろくないんです。何かもの足りないのです。

〝秋はさびしい〟〝落葉はかなしい〟なんて感じていたら、新鮮なものは書けないような気がします。季節をもっと別な見方をしなくてはいけません。

君も今年の冬をちょっと横目でみたら何かがふと飛びだしてくるかもしれませんよ

4号もよろしく　優しいあなた様へ

リーマのセーター

はちろすず

ある日、私が森の中のリーマちゃんの家を訪ねると、リーマちゃんは緑色の糸で何かをいっしょうけんめいに編んでいました。

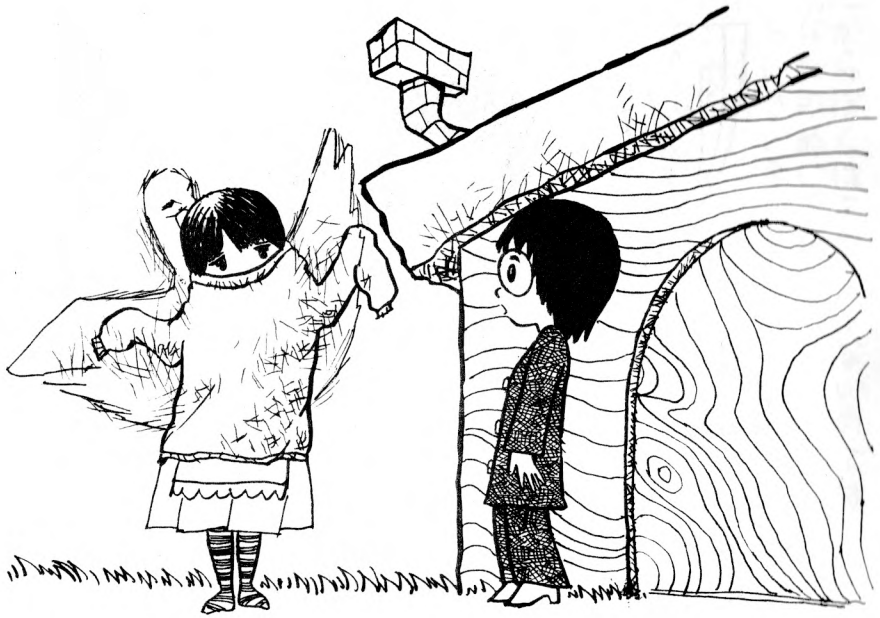
「何をつくっているの？」ときくと、リーマちゃんは何も言わずに紙に〝一週間たったら来て〟と書いて渡しました。そのリーマちゃんの手を見ると、ひどい傷だらけだったので、

「どうしたの？」ときくとやはり何も言わずに、にっこり笑って首を振りました。仕方がないので、私は薬箱から包帯を取り出してリーマちゃんの手に巻いてあげました。

「一週間たったらまた来るね。」と言ってその日は帰りました。

私は一週間のあいだ、リーマちゃんは一体何をしているのかしらと思いながら待ちました。そしていそいそとリーマちゃんの家へ出かけて行きました。

リーマちゃんは出来上がった緑色のセーターをテーブルの上に置いて待っていました。私が理由をきこうとすると、それをさえぎってリーマちゃんはにこにこ笑って言いました。



「これ、白鳥の王子様のセーターなの。」

私がどういう意味なのか、たずねると、

「白鳥の王子様のお話知ってるでしょう？あのお話と同じようにしてつくったの。」と答えました。

「〝同じように〟って……じゃあ、いらくさを摘んできて糸にして編んだの？」

「そう」

「あ、だから手があんなに傷だらけだったし、何もしゃべらなかったんだね。でも何故？」

「あのお話では白鳥にかえられた王子様がこのセーターを着て、元の人間にもどったけれど、私は裏がえしに着て白鳥になるの。」

そう言ってリーマちゃんは家の外に出ると、

「見ててて」と言ってセーターを裏がえしに着ました。するとリーマちゃんは本当に白鳥になって飛んでいってしまいました。

おしまい

ぬいぐるみのネコ

ある日
ピンクの部屋にできました
わたしの迷子のネコが
ぼくはくしうちのネコです
言へのはちいさいこんでいます
いちう言へ帰りなさい
まいちいまりなさい
さはこたいこたこです
ネコはネコです
ネコ〜はわたしのぬいぐる
ぼくはたくしはネコ〜じゃないの
わたくしはたくしはネコ〜
わどいたくしはたくしはたくしは

〝ネ〝なぜどきするのですか？〝
〝わ〝ただこずねましたこはてさこわいもの〝
〝ネ〝なぜしたずわさいのできましたか？〝
〝わ〝ただこはてさいやしまいるもの〝
〝ネ〝ぜしたずねしてきましたコ
〝わ〝ぜ指ねしているのですか？〝
〝ま〝ただ指さしているんだもの！〝
わ〝ったはさけびましたはしてしたの
そ〝りてしてひとたちは手をおろしました
わ〝はすしゅんとしてしまいました
わ〝こんとしてしまいました
〝かたごわしめいそうにしなってきました
〝わ〝ありしはんなさいなくていいのよ〝
〝ユ〝こりがなぐさいねて気にしなくていいのよ〝
〝ニ〝あとうめてあげました
〝コ〝りがはおまえはやさしい子だね〝
〝ー〝ンとうえ・げき・して言いました
〝ー〝ンがかはやさしい子だね〝
〝ま〝んげき・して言いました
〝れ〝てはじめて
〝す言われたので
〝やたれましたので
こさしこどくなりました
ら〝やしらなんているはずがないから
この子はこどもなんていてもいいんだ〝
はこどもにいてもいいんだ〝

ニャニャネコが言いました
おわにごっこやかくれんぼをして
あおそびましたもちろん
あお・そはもちろんおにです
〝わ〝もたもっしうびはかつかえられたころ
〝わ〝もっしうはかつかえられたころ
〝マ〝ーメイとあそびましたちゃ〝
〝マ〝ーメイドあそびましたちゃ〝
〝エ〝ーとあそびましょうよ〝
〝エ〝ーが言いましょうよ〝
〝パ〝わこいましたこ
〝パ〝わコもいましたこ
〝わ〝パるーいましたこ
〝わ〝パるーいましたこ
〝ま〝いがしゃるーいましたこ
〝ま〝いがしゃるーいましたこ
〝ま〝けどいがしゃるーいましたこ
〝ま〝けどいがしゃるーいましたこ
〝ま〝けどい

ふり返った自己

梁沼 恒かし

「おかあさん、ちょっと散歩してくるよ」
そう言うと、ヒロシは本を閉じて立ちあがった。
「いいの？散歩なんかしていて」と母が言った。
「試験まで、もう幾日もないのよ。がんばってくれなきゃ困るわよ」
「だいじょうぶだよ。すぐ帰ってくるよ」
「ほんとに、しっかりしてね」
「わかったよ」
そう言ってヒロシは、ドアを押し開けた。外は明るかった。
橋を渡って　路地に入る。
公園で、子供たちが楽しそうに遊んでいる。子供たちだけではない。
ベンチで寄り添う恋人たち。世間話を楽しむ主婦たちや……
みんなが、自分に休日を楽しんでいる。
こんな日に、なぜ、僕は勉強なんかしていたのだろう。
こんなはずでは……
ヒロシはすぐには帰る気になれなかった。
ふと　あたりを見回す。

キラキラと秋を色どる銀杏の葉。池をとりまく枯葉の絨毯。はしゃぎ回る犬たち。
それに風。
ほほをくすぐるように　過ぎ去ってゆく風は、つまらないことに悩んでいるヒロシを笑っているかのようだった。それに、なんだかとても　なつかしい気分にさせる。
少し遠出をしてみようと、ヒロシは思った。今日しかない。今じゃないと、二度とこんなチャンスはめぐってこないように思えた。ゆっくり自然を味わいたい。そのための遠出だった。
彼は公園を出て　ぶらぶらと歩いて行った。
丘の上にヒロシもかつて通ったことのある小学校がある。ひさしぶりに来た気がした。芝生に囲まれた、古い木造の校舎が昔と同じように建っていた。
ヒロシは久しぶりに、心がノらぐのを覚え、芝生に腰をおろして校庭で遊ぶ子供たちをながめていた。
何分たっただろうか。
ふと校庭を見ると　十数人の子供たちがボールを持って走り回っているのが目に映った。ヒロシも昔やった覚えのあるドッチボールだ。ヒロシは「楽しそうだな」などと思いながら、その子供たちを見ていたが不意に不思議なことに気づいた。その中のひとりが、自分の子供の頃とそっくりなのだ。顔や体つきだけではなく、声や歩き方までもよく似ている。
ヒロシは偶然だと思いながら　変な気分でその子供たちをみていた。
しばらくして、さらに不思議なことに気づいたのだ。その子といっしょに遊んでいる仲間たちにも、みんな見覚えがあるのだ。
よく勉強のできた、たかし。
泣き虫だった、いくえ。
おしゃべりだった、あきこ。
あれは……
何かの拍子に　自分の過去が目の前に再現されているとしか思えなかった。
ヒロシは声をかけようとしたが、やめることにした。声をかけても、子供たちが変な顔をして逃げてしまうだけだろう。
いつの間にか、子供たちは校庭から走り

去って行った。

「いままで、何をしていたのよ」
帰ったとたん、カン高い声が飛んできた。
「早くしないと塾におくれるわよ」
ヒロシはだまって自分の部屋にもどった。
「まったく時間にルーズなんだから」
「……」
ヒロシはさっきのことを考えていた。知らないうちに昔を想い出していたのだろうか。ためらいの中に夢をみていたのだろうか。
それとも……
今の彼にはどちらでもよいことだった。

おしまい

北風のバラード

原案・高見優
文・わらべまきひと

寒い冬の風が吹きぬけていきます。枯葉の風車を回しながら。冬の風にはだれも良い顔はしません。こんな冷たい風が好きな人なんているはずはないのです。
その少女も例外ではありませんでした。少女は小さな洋裁学校に通っていました。毎日三時に学校が終わりますが、冬になってからいつも学校の入口で彼女を待っている人がいました。いや人ではありません。今年生まれたばかりの北風でした。
少女はいつも決まった時間に帰ります。今日もその時刻に少女は友だちと出てきました。北風は少女がひとりになるまで、彼女たちの後を風車を回しながらついていくます。
次の角で、少女は他の友だちとは反対の方向に曲りました。北風はピューー……と少女に近づき、優しく包みました。
ところが、ところがです。少女は身を縮めて、とても困った表情をしたのです。北風は、さらに優しく包みます。しかし、少女は怒りの色さえ浮かべて
「何よ！この風、もうやんなっちゃうわ。どこかへいけばいいのに！この言葉に北風はがっくりして、すごすごと帰っていきま

した。北風は　この少し太めの少女が大好きだったのです。

そして、翌日も翌々日も毎日北風は少女に手をさしのべるのですが、彼女はコートのえりを立てて震えます。決してよい顔はせず、いつも〝つん〟と怒ってしまうのでした。北風は悲しくて哀しくてやりきれません。しかし、北風は、とても乾燥しているので、涙さえでないのです。

とうとう北風が失恋する季節がきました。春が来て　北風は遠くに追いやられてしまったからです。

春風は少々荒っぽく吹きます。しかし、ちょっぴりきれいになった少女は、

「ああ、もう春ね。とても快いわ。恋でもしようかしら」と、北風が優しく包んだときとは　まるっきり正反対の笑顔です。

そんなとき、

〝ああ見栄えが、優しそうなのって得だよ〟と北風の声が聞こえそうです。

天国と極楽のレクチャー

竹下けい

あるここち良い、天国の昼下り、お仕事も一息ついたキリスト様は、ちょっと散歩へと、お出かけになりました。光にあふれた天国は、あたりに見たこともないような花々が咲き乱れ、そのキラキラ輝く、花びらからは、かぐわしい香りを、ふりまいておりました。そんな中で、キリスト様のお顔も自然にほころび、今までのお仕事のつかれも、ふっとんでしまわれた御様子でした。あまりの上気げんのため、キリスト様は、ふと、おシャカ様のことを思い出されました。

「そうだ、久しぶりに、おシャカ様に、お会いしに行こう。」

そう思い立たれて、さっそく極楽の方へ向われました。

天国から極楽までの道のりは、かなりあるのですが、キリスト様は、ゆっくりと、歩いてゆかれました。

極楽の入口では、番兵たちが、キリスト様の、突然の御訪問におどろいて、大あわてで、おもてなしの用意をと、走り回っておりますと、キリスト様は、

「いやいや、私は、ちょっとおシャカ様にお会いしに来ただけだから。」

おしまい

と、おしとどめて、御自分一人で、おシャカ様のお部屋へ、行かれました。お部屋のある宮殿までの間にも、天国と同じように、美しい花が咲いております。でも、ここの花たちは、小さく、清楚な姿です。時に、風に乗って、香りもしてくるようです。

そんな中を、キリスト様は、おシャカ様の宮殿へ向っておいでしたが、ふと、蓮池のほとりで、足をお止めになりました。蓮池の向う岸に、誰かが、池をのぞきこんでいるのが見えます。よくよく見ると、それは、おシャカ様でした。キリスト様が呼びかけても全々聞えないほど一心に、おシャカ様は、池の中をのぞきこんでおいでです。その姿が、あまりこっけいなので、キリスト様は、少々ちゃめっ気を出されたのです。このちゃめっ気が、後に、えらいことになってしまうのです。そりゃあもう大変なことで、いやいや、話は、そこまで進んでない、もとにもどしましょう。

さて、ちょいと、ちゃめっ気を出した、キリスト様は、ぬき足、さし足で、池を回り、おシャカ様の後へと回られました。おシャカ様は、全く気づかず、まだ、池の中を、のぞいていらっしゃいます。そこで、キリスト様は、大きく息を吸って、

「ワ〜〜〜。」

と、大声を張りあげました。

その声の大きいことといったらありません。極楽中にひびきわたり、目ざめるのに、あと、数千年かかるという、ミロク様まで、目をさましたと言いますから、まったくおどろきです。いやいや、それよりも、もっと大変なのは、その声を、後から、まともにくらったおシャカ様です。池をのぞいていた、そのままのかっこうで、頭から、ドボンと、池におちてしまわれました。

さあ、大変です。極楽の蓮池の底は、何故か、地獄につづいております。おシャカ様は、地獄へまっしぐら。

池のほとりでは、キリスト様が、困りはてて、立っていらっしゃいます。

「いや、これは困った。少々度が過ぎたかな。ちょっと、ちゃめっ気を出しただけなんだが、おシャカ様は落ちついていらっしゃるから、あけくらいの声を出さないと、おどろいてくれないと思ったんだけれども。」

そのうちに、宮殿の方から、何が起こったのかと、たくさんの方々が、飛び出していらっしゃいました。

すると、キリスト様は、

「えい、こうなっては仕方がない。こんなことをしてしまっては、何をされるかわからない。三十六計をきめこもう。」

と、スタコラ、逃げだしてしまわれました。

観音様たちが、そこへかけつけたときには、もう影も形もありませんでした。

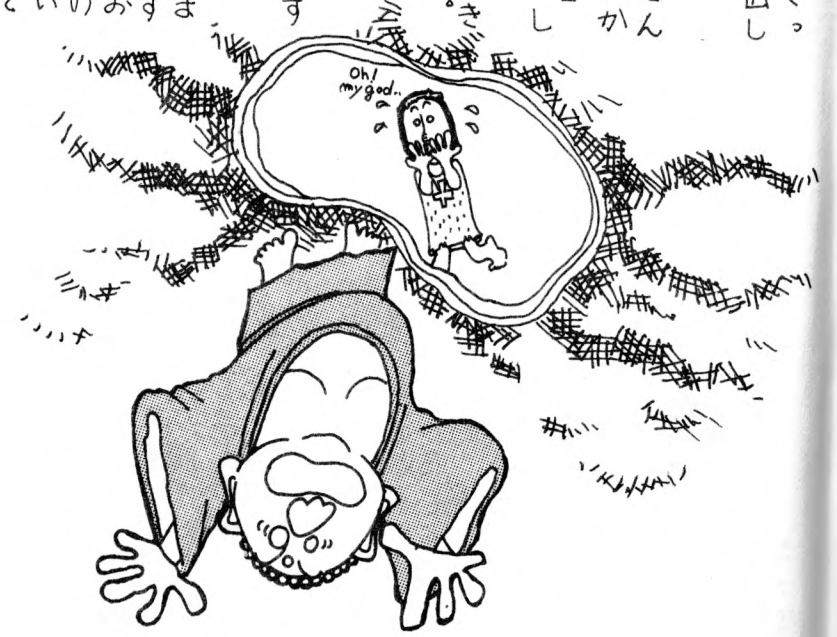
観音様と、それにくっついてきた、十ぱひとからげの番兵たちが、しばらく、そのあたりを、みまわしております

と、

「オーイ、オーイ。」

と、どこからともなく声が聞こえてきます。

おやっと思い、耳をすませてみますと、どうやら、それは、おシャカ様のお声のようです。おまけにそれは、蓮池の底から聞こえてきます。これはいったいどうしたことかと、みんなで、池をのぞいていますと。池の底の、そのまた底の地獄で、おシャカ様が、血の池で、あっ



ぷあっぷ、しておいでです。それを見て観音様が、

『これが、本当の、地獄に仏だ。』

と、言ったとか、言わないとか。

いやいや、そんなバカなことを言っているひまは、ありません。それより、早くおシャカ様を、お助けしなければなりません。観音様は、番兵に、長いロープを持って来るようお命じになりました。ところが、その番兵、いっまでたっても帰って来ません。いいかげんじれた、観音様が、ふと目を止めた蓮の葉の上に、一匹の蜘蛛がおりました。観音様は、この間、おシャカ様が、蜘蛛の糸で、地獄の亡者、カンダタを助けようとしたお話を、思い出されました。

「そうだ、この蜘蛛の糸で、おシャカ様をお助けできるぞ。」

そうおっしゃって、観音様は、蓮の葉の上から、蜘蛛をその手におとりになってそっと、地獄のおシャカ様へと、たらしました。地獄へたらされる蜘蛛こそ、いい迷惑なのですが、この際そんなことも言っていられません。蜘は、静かにおシャカ様の頭の上へ降りてゆきました。

観音様は、蜘蛛が、おシャカ様の頭にとどくと、

「おーい、おシャカ様、これにおつかまりなさい。」

と呼びかけました。それに気づいて、顔を上げたおシャカ様は、やれうれしやと蜘蛛の糸を、登り始めました。

ようやく半分ほど登ったところで、一息つかれたおシャカ様が、ちょっと下を見て、びっくりしました。なんと、地獄の亡者たちが、あとから、ついて登ってくるではありませんか。おシャカ様が、あわてて、

「これ、お前たちは、ダメですよ。」

と言った途端、糸は無情にも、おシャカ様のつかんでいたところから、プツリと切れて、あわれ、おシャカ様は、再び、地獄へまっさかさま。落ちたところは、針の山でした。

極楽では、観音様が、これは、しまった、しくじったと思っているところへ、やっと番兵がロープを持って帰って来ました。さっそく観音様が、そのロープを針の山のおシャカ様の方へ、投げ込みますと、針の山で七転八到の、おシャカ様

「は、もうつかまるのが、精一杯という様子です。無理もありません。毎日、極楽で、優雅にお暮しのお方ですから、地獄の責め苦に耐えられるわけがありません。

そこで、観音様と、番兵たちは、おシャカ様の身に、ロープをしばりつけて、ズルズル、引っ張り上げました。

やっとのことで、地獄を、脱出した、おシャカ様は、もう、息もたえだえで、そのまま数日、寝こんでしまわれました

やっと、起きれるようになったおシャカ様は、自分を地獄に、落とした犯人の捜査に乗り出されました。番兵の話によりますと、あの日、キリスト様が、極楽に来ていたと言います。極楽の住人に、あんな大きな声を出した者は、見あたりません。犯人「キリスト」説が段々、有力になってきましたが、いまひとつ決め手になるものがありません。おシャカ様は、うつうつとして、楽しめる日がありませんでした。

そんなある日、日本の、八百万(やおよろず)の神々の開くパーティが、ありました。それにキリスト様も出席すると言うので、おッ

ャカ様も、勇んで出かけました。パーティの会場では、世界中のいろんな神様が、楽しく、お話をしておいでしたが、中で、キリスト様だけは、何故か一人、沈んでいらっしゃる様でした。やはり、先日の極楽での事が気になるのでしょうか、さっかんに、人目を気にしていらっしゃいました。

そんなキリスト様を、目ざとく見つけたおシャカ様は、後からソッと忍び寄りその肩をポンとたたきました。キリスト様は、飛び上らんばかりに、おどろいて振り向きますと、そこには、おシャカ様が、ニコやかに、ほほえんで立っていらっしゃったもので、二度びっくりして、今度は、本当に、飛び上ってしまわれました。

おシャカ様は、ニヤリとされて、お話を切り出されました。

「いやあ、キリスト様、お久しぶりですな、お元気そうでなによりです。」

キリスト様は、いや、先日、後からお会いしましたとも言えず。

「あ、あの、お、お久しぶりです。」

しどろもどろで受け答をしています。

「先日は、極楽へお寄り下さったそうですが、私、ちょっと席をはずしており、大変失礼しました。」

おシャカ様は、さっそく、問題の核心を、ついてきました。

「いや、その、あの、こ、こちらこそ、あの、と突然おじゃまして、ど、どうもその……」

キリスト様は、さとられまいとして、必死ですが、根が、正直なお方ですから、どうしても、お顔に出てしまいます。そこをついておシャカ様が、ぐいぐいせまってきます。

「今度おいでの時は、前もってお知らせ下さい。極楽をあげて歓迎しますぞ。」

「そ、それはどうも、な、なんと、まあどっこい……」

「ところで、キリスト様がいらっしゃった日に、極楽で変なことが起こりましてね。」

「へ、変なこと。」

キリスト様のお顔から、音を立てて血の気が引きました。おシャカ様は、さらに追い打ちをかけて、

「そうです。誰かが大きな声を出して、極楽中に、大さわぎを起こしたんですよ。」

「そ、それは、あ、あの、その、大変なことで、その……。」

「えッ、で今、その犯人をさがしてる最中なんですよ。」

「そ、そうですか。」

キリスト様は、おシャカ様への答につまりながらも、おシャカ様が、自分を犯人とにらんではいるが、確かな証拠はないことを、見ぬいていらっしゃいました。そこで、この場をなんとか切りぬけようとし始めました。

「まあ、しっかりおやり下さい。私ちょっと用がありますので、これで。」

「そんな、キリスト様、何か、御存知じゃないかと、お聞きしようと、思っておりましたのに。」

「おシャカ様も、食い下りますが、いや、私は、何も知りません。ええ、そうです、何も知りません。では、これで失礼。」

そう言って、キリスト様は、電光石火消えてしまいました。

しかし、おシャカ様は、完全に、犯人